

関西現代俳句協会 会報

No. 35

2006. 9. 30

二〇〇六年度「総会」特別講演

「俳句と私」

講演・花谷和子 顧問



(拍手)

「藍」俳句会の花

谷和子でございます。

ささやかな雑誌を発

行して今年、創刊三

十三周年を迎えます。

本日はご指名によりまして皆様の大切なお時間を頂戴いたしますこと、厚くお礼申し上げます。特に話題も持ち合わせていない私ですが、俳句に関わっていつの間にか五十年

余り過ぎましたので、演題を「俳句と私」とさせて頂きました。

先日、或る書物を読んで気付かせてもらうことができました。それは近頃、例えば「生徒と先生」「先生と生徒」、「母と子」「子と母」のようにへと

でつながる対立関係になっている。以前はそうでなかった。例えば「母の子」「子の母」或は「先生の生徒」「生徒の先生」というようにへのでつながる関係だったから和やかで、従って近年起こるような事件は少なかった、という説です。

たった一字へとへので随分違いますのは、作句の上でのへてにをはの使い分けに通じますね。

そこで私も、その説にならしまして、本日は「俳句と私」ではなくて「私の俳句」を話させて頂きたいと思えます。「私の俳句」となりますと、いきおい私事にかたより、お聞き苦しいと存じますが、お許しください。

ふり返りまして私の俳句が長い間―正確に言えば五十三年間―続いてまいりましたのは俳句を通して多くの佳き出会いを、たくさん頂いてまいりましたお蔭です。今日は、私の初心時代にお出会いました先生方との、エピソードを中心に話したいと思えます。

私が、現代俳句協会員に推薦いただきましたのは、昭和

三十七年（一九六二）です。四十歳の時でした。ここに殊更に三十七年と申しますのは、同じ年に伊丹三樹彦先生のお世話になりました、第一句集『ももさくら』を「青玄」同人、楠本憲吉氏の琅玕洞から出版したからです。

「私の俳句」ということで、自分の話ばかりになりごめんなさい。『ももさくら』の時代はひたすら身辺を詠っています。身辺のことを通して自分自身を厳しく見つめる姿勢を貫いていました。つまり、外側のものに触発されての作句ではなく、ひたすら内側を見つめるといいますか、詠まれたものは身辺のことですけれど、自分の内部の声を忠実に表現したいと思っていました。そういう意識で『ももさくら』時代は書いていたと思います。

後に私は五十七年九月号の「藍」に「―内部の声に忠実だった初学の頃とくらべ、私は今、俳句に押れすぎているだろうか」と記しています。外へ出掛ける環境でなく、殆ど家庭内におりました。ふり返りまして、当時はとても純粹に俳句と向き合っていたように思います。『ももさくら』の出版記念会には、関西の主だった俳人の方々にきて頂いて有難いことでした。

ちなみに「青玄賞」は昭和三十二年の秋に受賞。先ほど豊田都峰先生から過分な紹介をいただきました「現代俳句協会賞」の候補に初めて推薦して頂きましたのも、同じ昭和三十七年だったのです。ですから、この年は協会員に

なった年、そして初めて「現代俳句協会賞」の候補にして頂いた年でもあり、繰り返しますが、私にとっては特別な年といえます、第十回にあたる昭和三十七年度の「現代俳句協会賞」を受賞なさったのは掘葦男氏、翌年の第十一回は林田紀音夫氏が受賞されています。受賞の句を少しあげますと

沖へ急ぐ花束はたらく岸を残し

掘 葦男

いつか星ぞら屈葬の他は許されず

林田紀音夫

これら二句からも分りますように、当時は前衛的な俳句や社会性の濃い作品が主流だった時代でした。

なお、この三十七年にはじまり、昭和五十四年度、昭和五十九年度、平成四年度上半期、平成五年度上半期、平成五年度下半期、とたびたび「現代俳句協会賞」の候補に挙げて頂きましたが、平成六年度上半期に東京の中嶋秀子さんと共に、推薦くださった先生方のお蔭で、第四十三回「現代俳句協会賞」を受賞しました。

このように本当に遅々とした歩みですが、毀誉褒貶に拘らないで続けてまいりましたお蔭で、はじめに申し上げました通り、現代俳句協会員として、本当にたくさん佳き出会いに恵まれてまいりました。俸せだったなあと感謝しております。

また、私が現代俳句協会に推薦いただきましたこの、昭和三十七年は、初めて「現代俳句協会関西地区会議」が組織された年でもありました。阿倍野区の以和貴荘で発会式があつたと思います。

当時の地区会議・議長は榎本冬一郎さん、地区委員には、掘葦男、鈴木六林男、伊丹三樹彦、赤尾兜子、島津亮、橋間石、稲葉直、波多野爽波、丘本風彦、八木三日女の諸氏、そして事務局員は、田中真沙流、三宅三(美)穂、船川涉氏らでした。このように、お名前をあげてゆきますと、すでに故人となつた方も多く、お一人お一人のお姿が懐かしく思い浮び、ご交誼を頂きました日々が甦つてまいります。お蔭で関西の―関西に絞りましたお話をさせていただきましたが―こうした力量のある作家と親しくさせてもらいましたのも、現代俳句協会のお蔭です。

総会には、横山白虹先生も出席され楽しいひとときを過ごしたのも思い出です。ところで「私の俳句」ですが、俳句を始めましたのは、極く単純なきっかけからでした。戦後、豊中市の或る婦人会の俳句グループに私の母が仲間に入れて頂いていたことからです。

十名ほどのメンバーでした。鳥越憲三郎先生の奥様の、鳥越すみこさんや、現在「南風」主宰の山上樹実雄氏の母堂などがご一緒でした。山上樹実雄氏はその頃まだ学生でいらしたように聞きました。確かお医者さんの学校に行か

れていたと思います。私の家の座敷で句会をもつた時もあります。あまり文学に興味をもたない母がするのだから私も、と思いましたが。たまたま末の子供が幼稚園に通い始め育児にあまり手がかからなくなっていたのもきっかけの一つでした。俳句は形式が短いから、忙しい主婦でもできるのでは―という単純な理由で俳句をはじめることになりました。

当時私はすでに三十歳を過ぎていましたので「晩学だ」との思いが強かったです。少女時代に油絵を導いて下さった坊一雄先生が「絵は自分ひとりで描いていてもいつかは上達できる。しかし、それには時間がかかる。よい先生について教わるのが早道だ」と教えて下さったので、著名な先生が来られる夏季講習会などに参加したのを思いだし、「俳句も勝手に作っただけだ。せっかくするのだから先生について勉強しよう」と早速、近くの商店街の本屋さん懇意にしていた女主人に「俳句をしたいのだけれど、どうしたらよいかしら」と相談にゆきました。すると「閑古堂のご主人が俳句をしてはりますよ。聞いてみられたら」と教えて下さいました。私は早速その足で「閑古堂」をたずねました。「閑古堂」というのは古書店の名前で「安く買って高く売る店」などと掲げられている一風変わったお店です。ご主人はいつも店の奥で何か書き物をされていました。おたずねした私は「俳句をはじめたいので、どんな本で

勉強したらいいですか」とご主人にお聞きしますと、俳句雑誌を三、四冊出して並べて見せて下さいました。私にとつてどれもはじめて見る俳句雑誌です。分厚くて立派なものもありましたけれど、そのなかで、雑誌は薄いけれどもとても新鮮な作品と考えるのが並んでいるのがあり「これを頂きたい」と早速つづけて購読することをお願いしました。それが、日野草城主宰「青玄」と私との出会うきっかけです。閑古堂のご主人の小寺正三先生が「青玄」の同人だといふことは後に知ったことで、先生はその時、何もおつしいませんでしたから、私はその日、小寺先生に勧められて「青玄」に入会したではありません。

私をはじめて手にしました「青玄」五十三号（昭和二十九年四月号）、今日持つてきましたが、ここには「信子五十句」——青玄以前——という特集が組まれていました。句集『月光抄より』として五十句が掲載されていたのです。

ひとつづまにえんどうやはらかに煮えぬ 桂 信子
夫逝きぬちちは遠く知り給はず

それまでの私は俳句といえは教科書で習った芭蕉や蕪村や一茶の俳句、そして当時母が庭の白木槿を詠って、母としては気に入りの

暁の露ののこれる木槿切る

わざ

などのように、どちらかといえば俳句は風流な遊びのひとつだ、とぐらいにしか考えていませんでしたので、この号の「青玄」はとても新鮮でした。日野草城先生をはじめ諸作家の作品に目覚めるようなときめきを覚えました。

手にしましたその「青玄」五十三号には草城先生の句では

冬ごもり七曜めぐること早し

日野 草城

不愉快な夢を見たりし朝の鵞

が載っています。きれいごとでない俳句に生まれてはじめて私は触れたのです。

参考までに、この「青玄」には無鑑査同人として、桂信子、棟上碧想子、神生彩史、八幡城太郎、伊丹三樹彦、島田洋一、吉田忠一氏など、綺羅星のように、力量のある作家の作品が並んでおり、それぞれが新鮮でした。

草城審査の同人欄（太虚集）の巻頭は、林田紀音夫さんの七句です。

枕木を持ちかねし顔引締る

林田紀音夫

夜の河に沿ひて徒勞の記憶ばかり

このような無季俳句もはじめて知りました。私の初心の頃作っていました句と傾向は違いますが、とても刺激をうけました。同じ欄に、五十嵐研三、小寺正三、楠本憲吉、小田武雄、日野晏子（草城先生の奥様ですね）、兵頭幸久氏らの作品がみられます。

なお、同じ号の雑詠欄には、阿部完市、津根元潮、谷口洋、的野雄、井上（山本）つぼみさんらの諸作家の俳句が掲載されています。一句欄が約六頁ありとても厳選です。今、出句なさってご自分の句が一句しか載っていないければ不満に思われるのではないでしょうか。その頃は、それぐらい厳しかったと思います。

私は、さきほど「昭和三十七年に現代俳句協会に推薦いただいた」と申しましたが、それに先立つ昭和二十九年に「青玄」の諸作家の作品を通し、新興俳句系の新しい俳句にふれ、俳句の自在な境地や可能性の魅力を知ったお蔭で俳句を歩んでゆくよるこびの道をつけてもらったのでした。この日がなければ、俳句に深入りしたかどうか分かりません。

ところで、当時の「青玄」では添削指導制度がありました。三保鶴磁先生（倉敷）、吉田忠一先生（西宮）、桂信子先生（箕面）、編集部同人（尼崎）などです。私は父の実家が箕面の牧落なので、これまた極く単純な理由から、同じ箕面にお住まいの桂信子先生に添削指導をお願いしました。先

生がまだ近畿車輛にお勤めだったころです。添削の句稿は今も残っていますが、ほぼ一年間、約四〇〇句のご指導を頂いています。ということは初心時代一日に一句は詠んでいたのですね。

その一方で、私は俳句が出来ますと、句稿を持ってせつせと小寺正三先生のお店「閑古堂」へ伺い、いろいろご指導を仰ぎました。家族の夕食や家事をすませ、やつと自分の時間になってから寄せて頂くので、たいいていは夕方か夜分です。

ふり返りまして、私は夢中になると、まわりのことが見えなくなる自分だったのだと今ごろになって気がつき、赤面しますとともに、先生方に随分ご迷惑をかけてきたのだと、申し訳なく思う次第です。

今ごろになって気付いた——と言いますのは、平成十五年に「藍」創刊三十周年記念大会の小宴に来賓としてご出席いただきました伊丹三樹彦先生のご祝辞や、小寺正三先生の令息、小寺昌平さんのご祝辞のなかで、初心時代の私の姿を話して下さいだったので、当時の私の姿がありありと甦ったからです。

私がしょっちゅう小寺正三先生のお店へ伺っておりまして或る日のこと、先生は「伊丹三樹彦さんはとても良い人だから紹介してあげる」とおっしゃって、伊丹先生にお引き合わせ下さいました。その時のことを伊丹三樹彦先生は

ご祝辞のなかでお話し下さり「小寺さんから、自分は小説の方で俳句は教えられないから、あんたに紹介してあげると花谷を紹介された。花谷には文章家としても世に出て欲しいと思ひ、随筆などをよく依頼した。すると必ず文章の原稿を持つて私に見せに来る。(先生のお宅は塚口でした)僕が二階でそれを添削している小一時間ほどの間は公子(夫人)と話し込んでいた」と話され、伊丹先生は、「うちの娘も三人おりますけれども『花谷和子さんいうたら、いつも原稿もつてきはつて伊丹文庫の公子の前でチーンと添削ができるまで待ったはつた人やね』と言つていた」と当時のことを話されたことばかりです。私はその後、四十七年に「青玄評論賞」を受賞、また現在までに随筆集を三冊、評論集を二冊ほど出版しましたが、初心時代、めいわくも省みないであつかましくご指導いただいたお蔭のほかはありません。

小寺先生の令息の小寺昌平さんも「池田の父の家へよくお越し下さった」と話してくださいました。その通り池田のご自宅へもよく伺ひ、そこで八幡城太郎先生にもお引き合わせ頂きました。お蔭で、城太郎先生にも私は随分ご厚情を頂いてまいりましたし、「青芝」の山本つぼみさん——現在「阿夫利嶺」の主宰をなさっています——そして現在「あかさ」主宰の飯村寿美子さん——達とも親しくさせていただくきっかけとなりました。

小寺正三先生の奥様もお優しく、月桂樹の苗をわざわざ私の家まで届けて下さいましたのも忘れられない思い出です。いま、その月桂樹は玄関の前で大木になっています。

ふり返りまして五十年前も前のこと、伊丹先生のお嬢さん達や小寺先生の坊っちゃん達の幼い目には、随分あつかましく変わったおばさんだと映つていたに違いありません。

繰り返しますが、俳句に一途だった私は、自分のことしか考えていなかったのを反省しますと共に、そのような私を受け入れて下さつていた小寺正三先生、伊丹三樹彦先生のご恩にあらためて感謝の気持ちでいっぱいです。

話しが後先になります。私が閑古堂へせつせと指導を仰ぎに通つておりました頃、小寺先生は、俳句のことだけでなく、俳句以前の人間性や文学精神といったものをよく説いて下さいました。川端康成とご親戚であつた小寺正三先生は小説を書いておられましたけれど、「人間性が大事や」と言われました。今ごろはあまり人間形成などということばは申しませんね。「俳句は人間形成が大事や」とよくおっしゃいました。ここに思いだしますのは、三好達治の詩を読むようにすすめてくださり、

母よ

淡くかなしきもののふるなり

紫陽花いろのもののふるなり

の達治の詩にふれたり、また俳句では、三橋鷹女、神生彩史、そして永田耕衣の作品を読むようにすすめて下さったことです。この方達の作品が新しいと言われるわけです。

白露や死んでゆく日も帯締めて

三橋 鷹女

恋猫の恋する猫で押し通す

永田 耕衣

夢の世に葱を作りて寂しさよ

永田 耕衣

朝顔や百たび訪はば母死なむ

永田 耕衣

まないたを蝦があるけり海鳴りす

神生 彩史

裸婦の図を見てをりいのちおとろへし

日野 草城

とこういう風な傾向が本当の意味の新しさなのだと思えられました。桂信子先生の『月光抄』も貸して下さい、それを筆写しましたのを私は今も持っています。俳句に夢中になっていったと思います。

小寺先生はまた、俳句だけを一生懸命考えているよりも手洗いの掃除をする方が大事だ、と言われるので、私は吟行に参加するときなどは、いつもよりも家事を念入りにして出掛けました。文学や俳句とは違う面でも、いろいろ教えて頂いたと思います。やがて草城選の私の句が「青玄」に掲載されるようになりました或る日、青玄同人で尼崎にお住まいだった河野閑子さんのちに「春燈」に参加された方ですが、私の家をたずねて来られ、当時、豊中駅に近

い「豊中クラブ」で開かれていた「青玄」豊中句会に誘って下さいました。

夜の句会でしたが、「青玄」豊中句会に出席するようになり、私はそこで、後に「渦」同人として活躍された三宅美穂さんや、樋口喜代子（神吉祥子）さん―後に神生彩史の門下になられました―達の女流俳人をはじめにお会いしました。指導者は吉田忠一先生で、林田紀音夫さんも時々来られていました。

私は、はじめて出席した句会の自由な雰囲気のとりになりました。茶道や、当時は母と一緒に謡曲のお稽古も続けていましたが、それらにはない自由な世界が句会にはあり、私のなかで抑圧されていたものがパチンとはじけた心地がし、ますます俳句の虜になりました。句会のあと一度だけ誘われるままに喫茶店へ行き、俳句の話が弾んで楽しかったのですが、帰りが遅くなり母に叱られたのが思い出されます。が、とにかく俳句に真剣で夢中でした。

現在では俳句に親しむ女性も随分多くなりました。恵まれたなかに、のびのびと俳句を楽しまれています。私たちの「藍」でも女性が多く、雑誌を出した当初の頃は夜の句会も開いていましたが、現在は原則として句会は昼間にしています。それは、ご家族のことを思うからです。

ところで、当時、日野草城先生のご病状もすぐれず、面会謝絶でしたが、せめて挨拶だけにでも伺いたいと思い、

小寺先生にご相談をしておゆるしを得ました。

金木犀の香る秋晴れのその日のことは生涯忘れられませ
ん。昭和三十年の秋のことでした。

師にまみゆとていねいに着る秋袷 花谷 和子

固くなって上気している私に先生は次の間のベッドから
とても優しく温かなまなざしを向けて下さいました。その
まなざしは今も目に灼きついています。

日野草城先生は投句をはじめてまだ日の浅い私の俳句の
傾向にもふれ、「短歌をしていたのですか」とおたずねに
なりました。私の俳句が詠嘆調だったからでしょう。末端
の一弟子の句風までご存知でも感激しました。そして
先生は、「どうか俳句を止めないで、続けてゆくように。
特に女の人は、誰々さんに負けたから——といって競争をし
て止める場合が多くて惜しい。どうか止めないように。」
と諭して下さいました。

草城先生はその翌年、三十一年の一月二十九日に逝去さ
れ、私のかなしみは言うまでもありません。

楳出づや縁うすかりし弟子の前 花谷 和子

私が先生に教えて頂いたのは、その優しいまなざしを通

して、一弟子への温かなお心、そして、「俳句をつづける
ように」とのお言葉だけです。私は後進の方にいくたびこ
の日の様子を繰り返しお伝えしてきたかわかりません。

なお、かりそめに始めた俳句に私がだんだん深入りする
ようになりましたその理由は、先に申しましたように新興
俳句系の新しい俳句にふれたこと。もうひとつには「俳句
はものを言わなくても判つてもらえる世界がある」という
よろこびを知ったからでした。いいかえれば、自分の思い
や考えを、ひとにも判つてほしいという私自身の思いが強
く、俳句は形式が短くて何も言えないけれど、相手に必ず
伝わると知ったからです。

若い頃の私は、ことばのむなしさに殆ど絶望感を抱いて
いました。自分の言葉——思い——が相手に率直に伝わらない
もどかしさ。

もともと内気な性格の上、一人っ子で育った世間知らず
の私です。少女時代から最も憧れていた「美しく生きたい」
という理想の世界と現実の人間関係との大きなギャップが
悲しくみじめでした。「今だったら」と反省するばかりで
すが、当時の私は、人は顔が違うように考え方もそれぞれ
違つて当然だということに気付かなかつたのです。

言葉を費やさなくても伝わる世界のある俳句。また、表
現は簡素で短いいけれど、それを深く鑑賞できる魅力を知り
俳句が次第に生きてゆく上での大きな支えになりました。

俳句をつづけることで、ほんらい小さくて狭く、また、感じやすく感情に溺れがちだった私の性格がだんだん変わってゆきました。それが有難いと思います。俳句は感情の世界をつきぬけたところにあると思います。心が動いて言葉が生まれます。ですから私はいつも「俳句は、すなわち、その人の心である」と思っています。心は、言い換えればその人の魂といえ、魂は不滅です。魂のうたが一句として残ってゆく俳句です。日野草城先生が「人と競争して負けながら止める、というのは女の人にありがちだから、止めないように」とおっしゃったお言葉を励みとして続けているうちに、俳句と自分が別々のものでなく、だんだんひとつになって来ました。

世俗的なことが身辺に起って大変な時こそ、そんな時ほど、「本当の自分」を見失いたくない気持ちが大きく働き、ちっぽけな自分自身の存在感を確かめたく俳句に親しみました。つまり趣味として、とか、風流の俳句でなく、俳句は自分そのものですから、上手・下手に関わらず真剣でした。五十歳になりました頃、私は、今まで随分まわりの方々にお助けられ、ご恩をいただくばかりの生活だったけれど、これからは何か地域社会へお返しをしてゆきたい、お役に立ちたいと願っておりました。

そのような時に、豊中市原田老人福祉センターでの俳句講座の開講の依頼をいただきました。私は俳句しかできま

せん。俳句でお役に立つのが嬉しいでした。それから、一年後、創刊同人の方々のお勧めもあり、当時、受持っていました新大阪新聞の木曜俳壇へ出句されていた方も参加下さって「藍」が創刊されました。小誌に関わって下さる人々にも俳句を楽しんで頂けるのが何よりのよろこびです。

昭和四十八年七月「藍」を創刊しました当時は、私ひとり現代俳句協会でした。平成十八年の現在、正確ではありませんが、約一三〇名あまり在籍していると思います。

協会員になるにも時代の推移があります。初期の頃は票をいただくため、各結社の先生方にお願いました。一人の協会員を生むために苦労した時代もありました。その点でも、今は随分楽になりました。目に見えないところで事務局の皆様をはじめ世話役の方々のお世話になっていきます。お蔭様で楽しい時を過ごせるのが有難いです。厚くお礼申し上げます。

新しく現代俳句協会会長に関西から女性の宇多喜代子先生を迎え、また、関西現代俳句協会会長に豊田都峰先生をお迎えしました。こうしたよい人間関係のなかで益々活気のある会になりますようお祈りします。

とりとめもない話しを、ご静聴いただきまして有難うございました。関西現代俳句協会の益々の発展と皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

(拍手)

(記録・桑田 和子)

ご挨拶に代えて



関西現代俳句協会

会長 豊田 都峰

はじめまして。この度会長に就任いたしました豊田都峰です。たいへん立派な業績を残してききました協会の、責任ある地位について

平成18年に入りまして、3月10日副会長会議が持たれ、欠席の山本会長から体調不調で引退したい、私豊田を新会長に推挙するとの一文が披瀝された結果、それが話し合われたのですが、その路線に決まり、総会までは私が会長代行ということで、職務を執行することになりました。

わけですが、身の縮まる思いの日々であります。よろしく願います。

例えば、平成17年、山本会長が体調を崩されていたので、9月25日に開かれた第一回副会長

実行委員長・会長代行。今まで、一つの結社を世話しての日々でしたが、全国・関西という重いものまでが、背の高い肩にかかってくることにになりました。背が高いだけ、引力は強いのです。

会議、第43回現代俳句全国大会が関西で行われるに備えて副会長6人体制がとられていたのですが、その6人と事務局が集まりまして、全国俳句大会の件について相談いたしました。以前からとも言われていたこととして、会場を京都に決め、その関係で、京都を中心に活躍している私に実行委員長を内定ということになった次第です。

6月6日、総会席上承認を受けたわけですが、たいへん力強いことに、3月現代俳句協会通常総会で承認されました宇多喜代子会長が同席挨拶されたことです。いろいろと助言も頂けること喜んでおります。

11月23日第六回運営委員会が開かれ、第43回現代俳句全国大会を平成18年10月21日京都・国際ホテルで行うことと決め、私が実行委員長に確定、準備日程や役員割振などを相談しました。

楽しい明るい場になるよう努力して参りたいと考えています。

全国俳句大会も意義ある中で成功させたいと努力を重ねて参ります。すべては会員皆様さんのお力があることです。よろしくお願い申し上げます。

まして、挨拶にかえさせていただきます。

関西現代俳句協会 役員交代のお知らせ

関西現代俳句協会

会長 豊田 都峰

去る6月6日の当会の「総会」におきまして、左記のように役員交代がありましたのでお知らせいたします。

記

退任 会長 山本 千之
新任 会長 豊田 都峰

(現代俳句協会理事)

留任 副会長 吉本伊智朗 ()
副会長 赤尾 恵以 ()
副会長 豊長みのる ()
副会長 谷下 一玄 ()
副会長 藤井富美子 ()
留任 事務局長 尾崎 青磁 ()

なお、このたび現代俳句協会会長に就任された宇多喜代子氏は当会の顧問に委嘱されました。併せてお知らせいたします。

関西現代俳句協会事業報告

平成17年7月～18年6月

会長 豊田都峰



この一年を省みて

思いがけない事ではあったが、山本会長の事故による辞任と言う不測の状況が発生したため、前半を山本会長、後半を豊田会長にゆだねると言う変則的な会の運営が行われた事は、万止む

終えないことであった。

①「〇五年度忘年会&第三十回句集祭」の開催

毎年十二月初めに大阪国際会議場で開催されるこの催しは、十二月十一日予定通り開催され、山本会長に代わって六人の副会長が代行し、無事終了したが、特に③以下の催しについて幹事にて提案され、種々質疑応答はあったものの、それぞれの担当者に一任された。なお、恒例の「句集祭」についてはコンピュータを使つての表示と、墨書による表示がいつもながら好評で、今年度の出展二十一冊という盛況であった。その後の忘年会もいつもながらの事であるが、久しぶりの宴会とあって、

日頃はめったに会えない先生方と言葉を交わす機会とて、かなり賑わつたのは主催者側としては嬉しい事であった。

②「愛知万博の一句」表彰

この句集祭のあとでこの年の夏を中心に名古屋付近で催された「愛知万博」に協賛して現代俳句協会中でも関西だけが実施した「愛知万博の一句」の表彰を行なつた。大賞一名、特選六名、その他多数の入賞者が和田悟朗顧問から授章された。

③全国大会の準備

ところでこの年も以前からの会の変貌の余波を受けて、大小共に色々動きつつあったが、なかでも一番の関心事は十八年十月二十一日、京都二条城前の京都国際ホテルにおいて開催されることになった「現代俳句全国大会」についてである。

先ず、前年十七年十二月大阪国際会議場において開催された、「〇五年度

忘年会&第三十回句集祭」の幹事会において内容・方法等種々話し合われた。その結果全国大会実行委員長には豊田都峰副会長が承認され、尾崎が引き続き事務局長に就任した。大会の骨格となる予算面では、目標を一二〇〇〇句と設定されたが、これは最近の会員状況を鑑みる時、極めて重い数字であり、果たして予定通り達成できるかどうか疑問視されたが、実行委員長の頑張ろうとの一言で、受ける事になった。

④各府県持ち回り吟行会を「京都」にて実施

滋賀県大津での琵琶湖クルージング。和歌山城内吟行に続く十八年度の各府県持ち回り吟行会は京都で行なうこととなり、まだ桜の盛りにある四月九日、京都有数の桜の名所円山公園を中心に開催した。幸い天気も良く、枝垂桜も真つ盛りとあって素晴らしい状況となり句会会場の円山公園内大雲院には今まで最高の一九一人の参加があった。

豊田都峰新会長の誕生 (本年度「総会」の開催)

前にちよつと触れたが、山本千之前会長は怪我をされた事が原因で、会長を辞任する意志を固められ、後任に豊田都峰副会長を推薦すると言う文書が尾崎宛送られてきた。そこで三月十日副会長の方々にお集まり頂き、その文書を開示した上、皆様方の了承を頂いた。但し次の総会までは会長代行として活動する事を了解された。

続いて六月六日、大阪国際会議場において本年度「総会」を開催。

席上、豊田新会長就任の件は理事会、総会とも満場一致で承認された。また、豊田新会長の力強い挨拶のあと、関西から初めて現代俳句協会の会長に就任された宇多喜代子氏の「現俳協は個人会員により組織されていますので、大きい結社とか小さい結社とか関係ありません。会員増を量りつつ、質を高め且つ関西の特徴を出していけたらと思

います。先ずは全国大会を充実される事です。」と言うような主旨のお話があった。

その他規約改正及び人事について。

i : 幹事及び幹事会を理事及び理事会と読み替える。

ii : 顧問の委嘱については、①八十八歳以上の関西現代俳句協会に功績のあつた方に加えて会長経験者もそれに加える。このため宇多喜代子氏も年齢に関係なく顧問に委嘱することになった。

iii : 理事、運営委員を若干変更する。

◎花谷和子氏の講演会

最近、「総会」の際には当会の顧問の方々に一時間程度の後援を御願ひし、先輩としての俳句や協会等との関わりなど興味深いお話を伺う事になっているが、今までは鈴木六林男、伊丹三樹彦、和田悟朗の各先生方から貴重な経験談をうかがうことが出来た。今年には花谷和子顧問に「俳句と私」と題する、先

生初学のおりの楽しいお話をうかがうことが出来た。これはいずれ発行する予定の会報のトップを飾らせていただく事になっている。

◎ホームページについての報告

ホームページは組織の顔として最近とみに活用されている手軽な媒体である。我々の関西現代俳句協会でも約三年前から活用し、告知や報告、会員の作品紹介、結社紹介などに活用して



現代俳句協会宇多喜代子会長の挨拶

るが、最近評判のよいのが毎月月代わりで掲載している巻頭の「月代わりエッセイ」である。約三年前から会員の色々な階層の方に、エッセイと作品を御願ひしている。内容は自由であるからかなりバラエティにとんだものとして喜ばれている。

◎結社誌『青玄』六百七号で終刊

伊丹三樹彦主幹による結社誌『青玄』は主幹の病気とあつて、六百号の祝宴を迎えた早々の十八年一月をもって終刊とされた。巨星墜つというが、われわれ現代俳句協会の発展のためにも誠に残念である。

(尾崎青磁)

企画部短信

一、〇七年度吟行俳句大会企画

過去三回の吟行大会(南琵琶湖クルーズ・和歌山城・春の京都)の経験を生かして次年度の吟行大会を検討中です。

吟行地は、各県の回り持ちの形ですから、来年は兵庫県を予定。参加者の集合しやすい交通至便の場所、ならびに日程を決定しますのでご期待ください。皆さまのご意見をお待ちします。

二、「忘年会&句集祭」十二月五日(火)

開催

今年も余すところあと少しばかり。恒例の「忘年会&句集祭」会場は、昨年と同様、中之島の「大阪国際会議場」です。多数のご参加をお待ちしています。

(増田耿子)

謹 悼

前会長

山本千之先生

八月四日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

平成十八年九月

関西現代俳句協会

絶好の花日和に恵まれて

『京都吟行俳句大会』開催!

二〇〇六年度 関西現代俳句協会の吟行大会は、四月九日(日)、京都に於て挙行された。

天候への懸念と、気まぐれな桜前線の北上が心配されたが、当日はまさに桜花爛漫。会場が、桜の名所である円山公園・八坂神社にほど近く、大層な人出で大会を盛り上げてくれた。

今回の大会は、参加者が自由に市内を吟行、作句する方法を採つたため、投句作品はバラエティに富み、伝統ある京都ならではの力作が揃った。



谷下・豊長・和田・豊田・吉本・花谷・赤尾・小泉の先生方

記

日時

二〇〇六年四月九日(日)

吟行

京都市内自由吟行

会場

東山祇園町南側 大雲院・
龍池会館

選者

和田悟朗、豊田都峰、吉本
伊智朗、花谷和子、豊長み

のる、谷下一玄、赤尾恵以、小泉八重子の先生方

参加者数 一九一名
賞品 選者特選賞 現代俳句歳時記(五冊セット)各一組

佳作賞 図書券

会場の大雲院は、織田信長・信忠父子ゆかりの名刹で、豊田都峰会長、「京鹿子」の佐藤眞隆氏のご紹介。運営にあたっては地元「京鹿子」の方々の絶大なるご協力と、会員皆さま方のご助力極めて大であった。ここに厚く御礼申し上げます。

素晴らしい会場と花日和に包まれた吟行大会。反省材料は来年への糧として役立てて行きたいと念じている。(増田耿子)

選者特選句

和田 悟朗 特選

十戒の様花房のつめたさは
桜見て人間を見て塔しずか

大阪市 辻本 冷湖
京都市 山村 道子

花谷 和子 特選

満開の花や重たきつけまつげ
花満ちて上京下京空ひとつ

城陽市 大西優九里
泉南市 天野 貞子

豊田 都峰 特選

同じ方みつむさくらのさくら色
花山河塔を真中に集ひぬる

豊中市 花谷 和子
京都市 村田富美子

吉本伊智朗 特選

朝桜幹より暗き男どち
切株にのこる鋸くづ花疲れ

大津市 志村 宣子
三田市 堺谷 真人

谷下 一玄 特選

八坂の塔日ありてさくら霞かな
日をひとつほりあげてぬる花曇

堺市 藤本 厚子
京都市 豊田 都峰

豊長みのる 特選

霧ぐもりして神鈴のにぎり鳴る
青雲に水の翳あるさくらかな

豊中市 平田 蘭子
豊中市 藤井 瞳

赤尾 恵以 特選

洛中の花見絵巻に紛れこむ
どこからも八坂の塔や花満ちて

西宮市 佐野 玲子
宝塚市 大津 茂子

小泉八重子 特選

花楓あふれ露店の火ごしらえ
切株に残る鋸くづ花疲れ

川西市 辻本 孝子
三田市 堺谷 真人

選者入選句

和田 悟朗 入選

八坂の塔行く手来し方花の乱
花万朶声の黄色くなつてゐる
あの世との距離を楽しみ桜狩
花冷えや結びて固き真田紐
花の下空気のようになる体
一鳥の一線越へし花ふぶき
肩に触れ地に降る落花ありにけり
洛中のさくら回路を迷っている

京都市 鈴鹿けい子
京都市 鳥羽 夕摩
加古川市 片山 嘉子
三田市 堺谷 真人
伊丹市 宮下百合子
松原市 池田 織恵
堺市 濱井 遊季
神戸市 福井ちゑ子

花谷 和子 入選

一軒のために橋ある花筏
花の昼花街すでに水を撒く
三十六峯洩れなく桜和讀かな
金いろの帯がちらりと花ぐもり
花楓あふれ露天の火ごしらえ
とやかくを気にせず今日の花見かな
大勢の他人ばかりが花の中
古着屋の繰り出す花の袋帯

豊中市 桑田 和子
城陽市 松本 鷹根
京田辺市 山中志津子
大阪市 大盛 和美
川西市 辻本 孝子
川西市 近藤詩寿代
大阪市 大盛 和美
大津市 三田 陽子

豊田 都峰 入選

はくれんのぼつかり空を信じをり
花明り路地に首塚ひとつ守り
朝桜幹より暗き男どち
さくらさくら此花開耶姫のゆめ
さくら咲きすぎて居場所をなくしけり
花の昼花街すでに水を撒く
洛中の花見絵巻に紛れこむ
花満ちてすぐ風の木となりしかな

京都市 加藤 翅英
京都市 山中 西放
大津市 志村 宣子
城陽市 鷺山 珀眉
亀岡市 井上菜摘子
城陽市 松本 鷹根
西宮市 佐野 玲子
尼崎市 小泉八重子

吉本伊智朗 入選

花楓あふれ露店の火ごしらえ
大勢の他人ばかりが花の中
蕨たけ西行堂の古藁書き
人はみな翳と佇み花万朶
にぎりめしこんがり焼いて桜かな
つつかい棒隠してしだれ桜かな
石に座し花の裏から花の声
真つさらとはゆかぬ都の朝ざくら

川西市 辻本 孝子
大阪市 大盛 和美
神戸市 幣守 玉江
豊中市 古藤みつ絵
神戸市 桂 鴻志
堺市 藤本 厚子
大津市 紙谷香須子
堺市 外山 安龍

谷下 一玄 入選

糸ざくら雨かんむりのごと枝垂れ
 またもやふものをふやして夕ざくら
 一鳥の一線越へし花ふぶき
 八坂の塔しのぐものなき櫻満つ
 通りゃんせ唄ひたくなるさくらかな
 白川の流れ落花のたゆるなく
 天辺は糞書しだれ桜かな
 紅しだれ一枝づつの揺れ違え

京都市 加藤 翹英
 京都市 豊田 都峰
 松原市 池田 織恵
 豊中市 後藤 充
 堺市 西上 邦子
 河内長野市 徳重 三恵
 堺市 濱井 遊季
 堺市 西上 邦子

豊長みのる 入選

仏塔の口ひらきたる花の昼
 花の昼花街すでに水を撒く
 花散つてしだれ桜のかるさかな
 花冷えや結びて固き真田紐
 花満ちて風のにほへる巨かな
 青雲や堂の鶯は花に泛き
 花の雲袴りの鈴の鳴り止まず
 さくら咲きすぎて居場所をなくしけり

京都市 佐藤 眞隆
 城陽市 松本 鷹根
 豊中市 平田 繭子
 三田市 堺谷 真人
 箕面市 松本 茜
 生駒市 梓 真弓
 豊中市 堀之内 潭
 亀岡市 井上菜摘子

赤尾 恵以 入選

顔見世やまねきの墨は酒で溶く
 春風や竹の奥より鎌の音
 「一力」は刻ゆるやかに春の宵
 大勢の他人ばかりが花の中
 初蝶のひとり遊びのねねの坂
 ネクタイの裏を見たがる花の風
 呼びとむることの叶はじ花吹雪
 轟くもりして神鈴のにこり鳴る

舞鶴市 林 日圓
 草津市 堀竹 善子
 京都市 鳥羽 夕摩
 大阪市 大盛 和美
 大津市 鈴木 順子
 城陽市 濱口 紫星
 長岡京市 児玉 素朋
 豊中市 平田 繭子

小泉八重子 入選

花の山このまま浮かば飛行船
 古都快晴仏のさくら神のさくら
 春風や竹の奥より鎌の音
 花明り路地に首塚ひとつ守り
 花の昼花街すでに水を撒く
 花咲いてもう散る刻を考へる
 あの世との距離を楽しみ桜狩
 風熄んで花の天地繋がりにぬ

京都市 藤川 弘子
 豊中市 花谷 和子
 草津市 堀川 善子
 京都市 山中 西放
 城陽市 松本 鷹根
 福知山市 西村 滋子
 加古川市 片山 嘉子
 豊中市 やまさき千草



豊田会長



会場風景

新会員の一句

今年、現代俳句協会にご入会頂いた方々から一句づつ頂戴いたしましたので、ご披露いたします。(到着順)

もうすでに風をとらえて巢立鳥
 麦秋やどの道過ぐも日の匂ひ
 清流のせせらぎ敷きて貴船川床
 真夜中に薔薇は散るらし水を飲む
 平城山の水なだらかに時計草
 畦を刈る草のにおいの青田かな
 大瀑布太古の音に昏れにけり
 万葉の風に吹かるる薄暑かな
 魔女図鑑の表紙まつ赤やパリー祭
 夫婦とて時折嘘も鱧の皮
 待ち合わせ場所は空港鳥雲に
 獅子独活に負けず劣らず竹煮草
 山盛りの穂の芽夕餉の影ふたつ
 水底に日の光あり泉湧く
 うつし世の生きの輝き蛍の夜
 真ん中の賑わっている菖蒲園
 送火や生者の中の上席に
 沙羅一花拾いてよりや寂光裡
 海くらし空港島の灯の涼し
 天界は真つ青に澄み雲雀鳴く
 悪漢の蓮華化生となりける
 木の芽径夫在りし日の刻もどす

俳星会 北原壽豆江
 風樹 汀 菜美
 龍鼻 石田 彰
 白燕 一ノ瀬道子
 かわなみ 山本 唯雄
 槐 雨村 敏子
 地帯 辻 兼子
 風樹 吉野 胡桃
 槐 延広 禎一
 藍 須田 京
 草風 安保美恵子
 足立 威宏
 鴻の鳥 松元 恵子
 松本 茜
 風樹 松本 茜
 群蜂 吉村美恵子
 花象 高橋 もこ
 南風・藍生・港 池田 元
 花藻 古津 翠
 半夜 井上 怜女
 風樹 田中 里佳
 京鹿子 佐藤 眞隆
 鴻の鳥 小畑百合子

崖下の水音嵩む今年竹
 わたくしの樹に生ふる木の茂れるを
 蛸狩人は優しき声になる
 空梅雨や煤の大梁鱗はしり
 山間に関の声ある海開き
 サングラスちよつと歪んだ町がある
 植田あを見まわる緋亡母に似て
 晩鏡に糸ひくごとく 沙羅落花
 夏の川等間隔てふ小宇宙
 結局は宿世になされ生身魂
 きびなごの干物の土産ビール酌む
 暮ニタ声乗こぼしけり
 怒濤音前触れとして一葉散る
 三伏や遊具ひとりで軌みおり
 パナナ喰う誰にも見られないように
 萩の花山家に添ふて咲き初むる
 梅雨空へ眼飛ばしけり傘の鬱
 吾を一巡虚空の波の揚羽かな
 男勝り一人主婦の座土雛
 尺獲や 近くて遠いものあり
 人と人ぶつかり合うて年暮るる
 山城にかかる弦月髪洗ふ
 藤寝椅子父の齢を越えしこと
 阿羅漢のささやき交す山紅葉
 ポンペイの風より淋し秋日ざし
 うきうきと浅草の鳩傘雨の忌
 銀山の道井戸替の水流す
 行く先は南阿蘇村 秋の峰
 金魚の水かえておくれと逝かれけり

南海 西川 せつ
 白燕・海程 玉記ヒミコ
 藍 松永 泰江
 風樹 やまさき千草
 文 市川 蘆子
 花藻 山崎 隆朗
 俳星会 寺山 和子
 青群 桑谷 孝子
 京鹿子 白川富佐子
 花象 西田 唯士
 蒲公英 金堀 恵
 京鹿子 辻本 俊子
 花藻 下谷 修
 季流 西川 吉弘
 花象 石井 久子
 風樹 藤原 み雪
 後藤 敬
 槐 中野 京子
 鴻の鳥 阿瀬八重乃
 大西 陽子
 摩耶 三木あゆみ
 斧 小原美代子
 渦 中嶋 桂
 風樹 豊長 哲也
 京鹿子 水口 扶美
 渦 小町 杏子
 斧 多田なりひさ
 林 仁子
 藍 西村 周三

一部改訂しました

関西現代俳句協会規約

第一章 総則・目的・事業

第一条 この会は、関西現代俳句協会といい、事務所は事務局長宅に置く。

第二条 目的および事業は現代俳句協会（以下、協会という）の規約に則つて、これを行なう。

なお、事業に関しては他に関西の地域性により重要と判断されるものについては、理事会の過半数の賛同を得て会長がこれを行うことが出来る。

第二章 会員および役員

第三条 この会の会員に関する事項は、協会の規約によるものとする。

第四条 この会には次の役員を置く。

- 一 会長 一名
- 二 副会長 若干名
- 三 理事 三十名程度
- 四 事務局長 一名
- 五 経理部長 一名
- 六 企画部長 一名
- 七 ICT部長 一名
- 八 会長、副会長、事務局長、経理部長、企画部長、ICT部長は理事に含まれる。
- 九 会計監査 二名
- 十 運営委員 若干名

第五条

第四条の役員については、理事数において推薦し、総会に於いて過半数の議決を得るものとする。なお、理事は当会に所属する俳句会の主宰ならびにそれに準ずる者より会長が推薦し、理事候補者の互選によりこれを決め、会長が委嘱する。

第六条

役員は業務分担は、協会の業務分掌に準じて行なう。

第七条 役員は任期は三年とする。ただし再任を妨げない。

第八条 役員に関する経費および費用の弁償は別に定める。

第九条 当会の顧問は、原則として満八〇歳を超えた功労顕著な会員の中から理事会が推薦し、会長がこれを委嘱する。

ただし当会の会長経験者は、その辞任の時をもって、年齢を問わず顧問に委嘱できる。

第三章 総会・理事会・運営委員会

第十条 総会は年一回、八月にこれを開催する。その他総会に関する細目は、協会の規定に準ずるものとする。

第十一条 理事会はその必要のある時は、随時会長がこれを召集する。重要な提案事項ならびに決議事項は、次の総会にはかるものとする。

第十二条 運営委員会は会長の諮問機関として、副会長および事務局で構成し、会の運営に必要事項を提起かつ審議し、その決定事項は会長より理事会にはかるものとする。

第四章 内部組織および所管事項

第十三条 この会の会計処理は、協会の規定に準じてこれを行なうが、地域性に鑑みた当会独自の処理については、別に定める「関西現代俳句協会・会計処理に関する規約」による。

第十四条 この処理に関しては、会長と会長が任免する事務局長及び経理部長がこれをおこなう。

当会の事務処理は事務局長がこれをおこなう。事務局長は会長が任免する。なお、事務局長は総会その他の会合に關して必要な事務局員を、会長の了解を得て依頼することができる。

第五章 付 則

第十五条 この規約に定めのない事項は原則として協会の定めるところに準じて行なうが、地域性を主とした事項に関しては会長がこれを定める。

第十六条 この規約は、平成十八年六月六日より発効する。

青年部よりご挨拶

青年部部長

上 森 敦 代

現代俳句協会・関西地区青年部発足からこの夏で十一年になります。いつも青年部活動にご理解、ご協力いただきありがとうございます。このたび、初代久保純夫氏、前・村井隆行氏に引き続き、青年部の部長を引き受けることになりました。部長としてその役割を果たせるかどうかは、疑問のあるところですが、わたくしなりに精一杯努めさせていただきます。よろしくお願いたします。

私自身、発足当初から参加させていただき、いろいろな人たちと出会い、多くのことを学ばせていただきました。これからも、そういう場所として、機会として青年部が存在しているよう、活動していきたいとただいま準備中です。近いうちに詳細をお知らせするつもりですが、今までの句会形式の活動を一時中断して、今からできること、今しかできないことをというスタンスで、大なり小なり私たちが影響を受けてきた現代俳句の作家たちの作品や人となりや、その成果を、それぞれの実作に生かせるようにと思っております。

活発な活動になるよう、多くの方々の参加をお待ちしています。ご意見ご要望等があれば、なんなりとお寄せいただきますよう、よろしくお願いたします。

2005年(平成17年)12月31日現在

2005年決算報告書

(関西現代俳句協会)

期首預金残高(定期預金)	2,300,000	期末預金残高(定期預金)	0
” (普通預金)	545,553	” (普通預金)	1,432,207
手持現金残高	273,153	手持現金残高	349,933
合 計(前期繰越)	3,118,706	合 計(次期繰越)	1,782,140

収 入 の 部		支 出 の 部	
摘 要	金 額	摘 要	金 額
本部助成金(第一次)	2,250,000	総 会 費	897,936
本部助成金(第二次)	132,000	句集まつり	959,956
総会懇親会々費収入	348,000	吟行大会費	667,643
句集懇親会々費収入	469,000	ホームページ維持	200,000
吟行大会参加費収入	148,000	事業費(愛知万博)	244,943
預金利息	23	助成金(青年部活動助成など)	13,554
(当期収入小計)	3,353,023	返出金(全国大会資金等立替)	92,434
		事務局経費	1,613,123
		事務費	254,522
		通信費	448,668
		旅費交通費	189,680
		役員手当	511,000
		会議費	199,028
前期繰越	3,118,706	振込手数料	10,225
当期収入計	6,471,729	当期費用計	4,689,589

□期末資産残高・次期繰越額(2005年12月末)

1. 普通預金(三井住友銀行千里中央支店)	1,432,207
3. 現金(事務局長預り金を含む)	349,933
合 計	1,782,140

上記の通り、平成17年の収支決算報告をいたします。

経理担当 中井 不二男 ㊞

2006(平成18)年6月6日

監 査 報 告 書

平成17年(2005年)関西現代俳句協会の決算報告を監査いたしましたところ、上記の通り、適正に処理されたことを認め、報告いたします。

会計監査 小泉 八重子 ㊞ 若森 京子 ㊞

2006年活動計画書

2006年6月6日

収 入 の 部		支 出 の 部	
摘 要	金 額	摘 要	金 額
本部交付金(第一次1172名分)	2,344,000	総 会 費	900,000
本部交付金(追加分)	100,000	句集祭	900,000
総会参加費収入	350,000	吟行大会費	700,000
句集参加費収入	450,000	出版・印刷事業費	600,000
吟行大会参加費収入	180,000	I C T関連費	300,000
その他雑収入(預金利息等)	10	助成金など	200,000
全国大会会費等雑収入	500,000	予備事業費	100,000
		事務局経費	1,770,000
		事務費	300,000
		通信費	400,000
		旅費交通費	200,000
		役員手当	560,000
		会議費	200,000
		慶弔費	50,000
		雑費	50,000
		振込手数料	10,000
		支出見込計	5,470,000
前期繰越金	1,782,140	次期繰越金	236,150
合 計	5,706,150	合 計	5,706,150